

5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

1曾
508
53

志保し梨
四扁十



門45
508
13

肩守四卷三十

○無住國師姓平氏

梶原景時々
娘始合家の字よりゆ

三年もの元光坊ノ住寺入峯の詔書見川勝

あれ一男のうりうり一女をうきあにひす

すと尾張國山田の本傳承源流傳

傳也

○古事記海府水春雷多ノ波ノ乃ハ雄雷旱ノ

其鳴ノ俗ノ名ニは唯雷多ノニミ年少氣也日之子

本草滙本農燒本門ノ本燒れハ火也その火

焚けど彼まれ多野也と後文ヒテ

和氣多表峯の神像林立有りトシテ先ツ慶安

古松樹石刻等一脂添れ唐之御ノ時年高の修神

弟と寛紀法勝を隔ててまちがえ裂して奥の
あり船奉りて郵便を詣でんす
候ふ事より柳と柳と富朝因に記さうす湖南郵
便局を柳と毒とい

あらわみ次帝の法勝を富朝へ一ゆきと傳ひ
ふと生れぬか水殿に野牛とあらわす
アラクシトマと記せり蒲原の轟のじ

説と一致のあらわ

東園千葉寺まで毎年大晦日の夜布良集す
人多きと云ふと大母弟とあらわす千葉千葉弟と
よしと重源被事の社深夜後人多きと云ふ

咲キ高弟の仰り給ひも先も似てて永樂院の社
内月写る余影堂やうそニテ神人集うそうそ
大母弟と云ひて布の風徳が高き事か
中止説経師と云はれと考へて唱説すとあらわす
安政院の陰裏と井の庭の内にわらの被と云ふ
自松東屋と云ふと考へて呪すと云ふとからて
手編木本草すと病とまのく常備とまことと是
今手編すと云ふ程也

母衣

軍家虎尾を法を御すとて王陵蘇武と云ふ
御すとて或ハ胞衣水敷す陰陽和合の義也

とくに或事神切皇后三韓を御少ひ附佐の神
制へり。うすの手筋を拂ひてお據り。かう虚度を
医り。そぞり。まねく拂ふ。拂く拂ふと身ヶ全拂ふ。拂
拂ふと拂ふと拂ふ。拂ふ。又羅の西衣と立
く。拂代多是武羅。書年家等。神衣の字と用い
る。在多是御衣と考へ。拂え。母衣と云ふ。と。も
全葉。仰。まは恩徳。姓氏。多源。年若。拂斗。之家
有句。古。木林。詔辭。う。置。写。歌。よ。か。う。
んや拂を。り。多。行。拂。か。そ。の。そ。と。す。ま。を
か。く。て。禮。う。品。か。く。拂。と。る。一。第。何。く。す。一
主。本。況。と。列。は。傳。多。り。拂。う。あ。可。入。

世上毀誉、非善惡人間、用捨、在貪富

故語

○
鳴呼。毀譽の事。多く是付さず。かう。と。う。
時。わ。公。と。う。一。手。有。す。多。く。反。舉。か。い
手。ても。伝。す。と。誣。せ。か。ん。ち。と。含。れ。る。と。う。
と。あ。と。う。

花

人物覗。紛花麗。助遂鉢。專比時。松与稻不及道傍。
権。名。の。あ。む。す。み。く。の。う。と。き。か。れ。と。一。翁。の。利。よ
も。う。か。く。あ。翁。の。名。を。都。の。堅。固。小。志。三。難。ま
友。奉。り。と。絶。風。水。綻。不。絶。し。ん。

丁亥七月十日の夜、尼山と並んで行つた庵之
家を表す津派あり。多寡同一九件木堂主也
あり。余わざり。先天御の販うる事也。往通院
主葬。一あり。知院殿深花露月大童子也。称
有。多祐天大人。未だも。主家と。翁。子。孫。也。有
句。一。多。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

捨乃大坂地辰ノ聖政

株殺者三刻

一 寛枚二万石刻

壓死三千六百人

主の溺死主方或少人等

一

一

病榻二十二所

外二損格
四ヶ所

一

砂礫大六石六千束

船

紀元變更地辰ノ改

一

長崎地辰民家頽倒以後。子供死。屋舍亦漂流

祥寺一宇。寢燒小石。移入新居。主女八百余人没死

内七十余人。

死難者

也。

尾聲町公十年朝流。男女家亦漂流

門下村。五個村。六千

人

亦有村家革勅金匱。一寸六分家八十金朝流。

本末相家三百軒人亡。漂流

也。

大泊家二十餘軒人亡。漂流

少沢家三十余割人亡、流没

新宮城大破崩^ル所家田家大槻顛倒

男女死人七百三十余人

在^リ而^リ四日の晚^タ六日逃^{ハシ}海^シ堅^シ舟^ヲ立^ス

巨勢ノ金若^{カワカ}_{大納言}清冷風^ノ絵^ヲ書^ク

金子^{金若子}令村^{相覧}公忠公氏相^シて終

と能^セシ

紀

金固^{キラカ}

法名^西深朝日^ノ河閣梨^ト行^フ一^ツ綵^{アヤ}の妙^ハ

宇多帝^ノ時^ノノ

狩野園

佛像^ノ妙手^後冷泉帝^ノ時^ノ之

賢真^{金固^ノ子}巻雲坊^{ヒツヅク}

左文何も學^ハ第^ノ一^ツ盈^{ウチ}子^ノナ^シて^シものあ
と^シひ^シか^シや^シれ^シモ^リま^テれ^シ絵^ヲ畫^ハ印^ヲ章^ヲ
辨^ハ事^ニと^シく^シよ^シま^シ人^ヲ白^ハ太^ハ作^ト云^フ
盈^{ウチ}あ^リ之^ノ紀^ハ名^ハ如何^シ。蓋^フこれ極^シ
納^ム長^シ良^好の齋^皇大^后宮太進^ハ經^{法名}寂^超の
子^ノ至^ミ丈^隆信^{越中守}^{上野外守}か^トか^ト隆^信の子^信
実^其子^隆經^{御門院}其^子隆^親代^ハ海^シ能^セシ
立^リ隆^親乃^シ子^信能^セシ^浦備^前行^智経^石に^捕て

ちうるの字太修ちの院子家本写り一絵太修と
少く称す今の人とて之を書くに畫か
まやくみたりア理唐法眼宋可憲高法眼
隆光信寺法眼俱慶俗名廣等も本作の度流
ゆるを名わ。繪字

或人向中空の書札宿空のたノ下二今より字ありの
所も何謂也。蓋中空家在空の押あら
日付の下に押す因革掌にさす書は二今より
押すふたり

名宋字上古一家ハナシムニ本寺古一家ハ
賀破ヤツ

名宋字上古一家ハナシムニ本寺古一家ハ
押すふと書又まうじと書とも押す
まうじと只不と押すノノ居多め在下革の有
在ら少く書れ家の秘を多めにけらむ
又問被子古にありや。答掌上家の古事と耳によき
被子へりこまうじと押すもやくつゞくの御と聲
人被子の左よりて妙御の財を被子の左の手の
うちが左を注るは多くなりつまは多く左の

右
左

又問蝶衣筋何をや 菅毛と塵と舊事蓋し 又問左
の口と包みて蓋元末包み古唐もく次近士へたのに
少翁多^シせんをもるか 有りて是の用句 有りて塵を入れ
まつてやる包一今 難在えつ子の少翁子へたるに
もうりきく一包り是妙と申ひすがゆうとりや
四言対相かとの被子の場毛た一にうりわらうよ
又別と今を行けとぞとて有る

我久居家^{アリ}のうへ山側處の一本木の八代^{ツバ}
まつるは山あそびれどもからり 一割^ハ先後度
役は四半^{セハ}の人に足りて少^シもあれば乃ひ
多金をとほまらず物をひきまつて少^シ遣^{ハシマ}せ

あかの面と其ノ一派の定式^{ハシマ}の指揮と文^{トモ}
みともぐくと他山家の山仙家化の多^シとひりあ
れとも今財我^ハ多^シ不^ハ軍役人取の山定^{ハシマ}とど^リ
すも^シとひりあれどもされども少^シ又^ハ餘^ハ少^シも
猶御^{ハシマ}と人少^シの多^シとひりあれどもすのも多^シと
左年^{ハシマ}とひりあれども是^{ハシマ}は日出^{ハシマ}を半^{ハシマ}と
凡^{ハシマ}業の家^{ハシマ}生れと軍役と考^{ハシマ}と仕事^{ハシマ}と又^{ハシマ}
の多^シも^シとひりあれども是^{ハシマ}を忠臣^{ハシマ}次第^{ハシマ}と又^{ハシマ}
思^{ハシマ}とすと似^{ハシマ}と似^{ハシマ}とひりあれども成^{ハシマ}

老人より仰

。春日井羽 桐把鴉の榜長サ百十間
。本列春日井羽山の木立は村^{ミチ}金陶の窯セニ因不取
戸村ミ十二ニありテ磁器と燒物^{ヤシキモノ}を販賣シテ仰
祀^{ヨリ}お懷^{ハグメ}の出ハ萬本の用^{ヨリ}アリ。四棟アリ
。令母船^{ヨシマツル}アリタヒトハ又青繪^{シタヌカイ}、燒付^{ヤクシキ}ト
は彼母^{カモメ}子孫^{コノシロ}三毛異邦^{ミツモコノイボシ}アリ。海^{シマ}ノ^ヲ喜^{ハシ}ケ^ス
比^{ヨリ}され^モ方^{カシ}アリ

。本將軍家内中除來勅^{シヤウムアシカゼ}アリカセリ。

。西月正三日豐施上原^{シヤウジシタハラ}入原^{イハラ}四日付
。本御葬送准^{ミツシヤ}高法親王^{コノシタモニ}志^シと號^スセキシテ
公辨

。身十日^ハ大羽^{タハ}其家脚^{シタハ}身十日^ハ脚^{シタハ}功七日^ハ脚^{シタハ}功今
。身十日^ハ二七日^ハ身十日^ハ脚^{シタハ}功七日^ハ脚^{シタハ}功八日^ハ身十
。本功十日^ハ二七日^ハ身十日^ハ脚^{シタハ}功七日^ハ脚^{シタハ}功
もと^ハナ^ハ十日^ハ身十日^ハ脚^{シタハ}功七日^ハ脚^{シタハ}功
もと^ハナ^ハ十日^ハ身十日^ハ脚^{シタハ}功七日^ハ脚^{シタハ}功
也^ハ身十日^ハ身十日^ハ脚^{シタハ}功七日^ハ脚^{シタハ}功

ヤウル

。身十日^ハ大羽^{タハ}其家脚^{シタハ}身十日^ハ脚^{シタハ}功今
。津光院薨去故十六日^ハ身十日^ハ脚^{シタハ}功今
。今女脚^{シタハ}功今 勅^{シヤウ}セキシテ身十日^ハ脚^{シタハ}功今

脚^{シタハ}功今

勅使菊亭殿

仙洞使醍醐大納言

内大臣伊季

昭尹

後清

有亂

東宮使小川方城中納言 女院使綾露 宰相
宣命使平松文納言 領使文内記

勅使に清口御老守仙洞來宮使大村筑後守
女院使母修行美作守中宗守前田
宗安正大准守ゆ佳木綱田監物守
名ゼテを今とく 二月廿日高宗守綱田監物
脚氣不至五月廿日と爲セテの津光院と稱
ましセナリテ瘧疾の即ヒモトア所傳不以不取
之セリとさなりみれをも
。幕將軍家裕薨逝の後四月廿八日即ヒス
うれ旭峯院高先右衛門と号ヒテ佛事物修

常憲院と宗室と證ニシテセレ 正一位

大政大臣と號セテ宣令下ホ

勘文八書經ノ胤征の文字ナリ

先王克謹天ノ戒臣入克常ノ憲百官修輔
厥后惟明タリ常憲者奉法修職ムニ
供乃事也云

沙羅室等公が多大ニシテ是字且ツ称譽ナリ
帝業の少名少のあらず遺ナリモシテ我利家子代と等
持院と号セテ一寺福徳のあり一佛也の文字
ナリあらう代僧家の号セテ院号ナリ

今我々主家東條の席官事ハ更ルイ
合徳スミリ以本道を至死の所トモ御傳事ニ
御役ヲマサシテ其の御名ニシテシテモシテ
典列ヨアリトウケルヒリ事ハテ先モ不法事
すテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
尾列勘波の紋竪のりん句又林ニ稿シテ度井ノ
八幡吉神墨大概ニツ稿シテ一旦ツ勘波の廣流牧伐の
紋也亦ニツ稿シテ

品 斯波光兵衛叔義良 尾張屋形清須ノ城主

斯波治部太輔義通

斯波右兵衛佐義錄

三松軒

津川弥太郎義長

津川玄蕃久義冬

牧下野守長義

尾列春日井郡川村ノ城主

母ハ牧光近女

牧与光衛門尉長清

尾列愛知郡小林ノ城主

妻、信長公ノ妹

女子 細井樟文助妻

牧喜光門尉長治

法名休菴

春日井郡長久子村ノ住

牧右衛門四郎長正

次ハ長清ノ弟

母ハ長久子ノ領主加藤太郎光門正光女

元龜三年十二月三方原ノ役屬ノ神原小平太戰功蒙^ノ旌
母羽六大夫酒井子九助走リ援ヲ長正飯テ淡松城而死ス^ノ甲
二歳法名喜祝

牧助右衛門長勝

初八又十良長次

勢丹大河内ノ役十六歳其後属瀧川一益^ノ甲丹天日山役
顯武功一益入^ル高野山之後奉社家康公相州小田原
役十九歳慶長十四年十月奉^ム命^ヲ来^リ尾卅名古屋
城ノ檢地繩張^ス

牧助右衛門

牧下野守

牧内記 奉社 尾

。尾列サ幕府猶未の左近少佐^ノ歴代

左山六中士^ノ本妙法院門^ノ之の父少^ノ一水亭

の夫^ノ新波民主維^ノて左近^ノ傳田氏頼

斯波元熟^ノ葉^シ御廣ノ仲子

織田幸平彦^ノ度^ノ常宝^ノ珍嶽

敏定^ノ伊勢守信安^ノ常水

織田伊勢守信安^ノ常水

敏定^ノ伊勢守信定^ノ常巖

織田伊勢守信康^ノ白巖

清田十郎左衛門^ノ信津^ノ常有^ノ哲有^ノ

池田勝三郎^ノ信輝^ノ後号紀伊守^ノ信長^ノ赤

織田源三郎^ノ信房^ノ勝長^ノ初八

中川勘右衛門定成^ノ信維^ノ

定成^ノ伊勢守信定^ノ常也

忍^ノの付^シ尾半^ノよ害^シを承^ム定成^ノも才傍^ノ

某とて之を山か城とぞいへしもの處に西田

佐入義久と敵を打つ事びえく

池田勝入

加藤遠江守泰景初仇内巫

武田五郎三郎清利

信雄
臣也

土方勘兵衛雄良

信雄ノ臣也
後改雄久

武藏入道常閑

園白秀次
後号ス三位
法印下

長尾武藏守吉房ト

三好守相秀俊

秀次
弟也

三輪出羽守

秀次臣

三輪立高右門

秀次ノ
臣

北條左門大夫氏勝

松平龍馬允忠頼

右二人園ケ原ノ役後守城

守城ヲ
臣也

小笠原和泉守吉次

三位中將忠吉卿
ノ臣也

平岩主計頭親吉

成瀬隼人正正成

成瀬隼人正正虎

成瀬隼人正正親

成瀬隼人正正輝

樂南の社大窓口乃い祝師也挾狹等袍の飲相竹と
用ひ元相竹ハ 皇家御袍すと申織すと云うや
少て地下の相官御入でと聞けりトテ曰諸社
の神人位袍の致ありハ莫く社の神衣と申すて帝
廟水廿六年樂南の社延窓の附の文書今多田爲
亦と存ニ内ト曰

樂南太神宮統二十日延窓祝師酒一升少

一於千神前七日爲ノウセ大窓八神宮奉社の酒多田爲

とてのくわん難可旅かと文

一祝師裝木の手と金を文

一伴と金裝木の手と金を文

一旦和方ちと前後の被残、金を文

一月延、室をうそ生神の店に裝木祝師を納メ
けまへ一條うそ神、夜とねむして名セ一丸竹口
窓口乃ひ也猶、掠等をねむの例よりれ自のものも
と有いあつてと云ふ

又尚左室を詣事と玉羅を祝師家とあら種類都と
左近也何者今ひととひ室を一丸用意すと帶み
あ家八年多よ候りて起二年未だ高一筋を但し

金を多く室をも辛走沙木と見張民と金を文

ノクシや古御の申上 用修あす

今不東羅大沐左少礼儀、身のヤシ事ト
ば方と自立批判而、後度室中抗事と見
年うり於神本大店に相定りて、年六ヶ
村宿を申上候月水布くうがゆきと云ふ事
字を乞ひ御引多々御許

佐久間半舟

七月廿八日

赤川立春

経堂

常陸

村井左多喜

貞経

絹白不動
青火

祝喪師服

千秋ノ歿

烈掩疾風

人ノ病

身の心事と云ふ事は仕事より時もくらべて家の次

身の心事と云ふ事は仕事より時もくらべて家の次

身の心事と云ふ事は仕事より時もくらべて家の次

侍の礼服多素襖上 乌帽子 小サ刀

畠の財懸素襖下 乌帽子ササシ 乌帽子ササシ

足利家のまゝそらくあつた 亨祿年高アツタ

ありそらくとわい一个の神りのよきよ

おひすく有りてかへ平ノ仕長公坐すよ

老年後田貞置老人追アツシテれ行アツシテ

供武故事云角觴アツガウ 六国ノ時所造アツメテ 一角觴注云
戰国ノ時講武アツガウ 以為戯樂アツガウ 相誇アツガウ 角其材力アツガウ 以相
觴アツガウ ト云々今ノ筋傍也

建武延元の頃鉢本玉器をの城主黒丸ノ名實化

とよあきは光朝の唐軍をうけたものかと雖も了
然と足りぬからに志丸の鉢ノリ所の鉢を
鐵舟は仕りめらう先に後斯波家の家をう
ね余氏うりうけ子孫が

夫伏左衛門の号は「中近」法宣乃い加藤
ゆくらべと鶴子と名うて又主雅セレ
是も「圓衛」ヨウエイと云ふと云ふと
され、吳邦のゆと號すホウすと仰す所列く今
諸侯親王大臣の少封シヤウボウは「中近」
官爵と號すともに正様セイザイと云ふと云ふ
皆此の史勢うる「中近」不審と云ふ不輪

處と云ふ事は不外也あらう「中近」
高半小引西の元日是來の寛永の大内の空手屋の
門下カサドとよき之松井の道多高タカシマと云ふと
空手ムツハの号をくわへて云ふと家傳カウジン傳承と称せ
てゐる本家を承とおもふとて立すすめの號
うる「中近」されても又今の「中近」松井と統べ一玉
美佐ミサからこそ一玉をうかうと云ふと云ふと
りと後世の松井の太宰タツイと云ふと號を號すと云ふ
あくまでものの風流ウラフも空すれどもうかうの子孫
もゆきと有りて今小笠コウラとありて或を河カワと云ふ

令之委那と猶も事一ノハシニモサザリ
テ修復と対策一ノタツトサシテ修復
朝野群載二十乞マニシニ憲宗我事ノナム
修復ありこれ在那官人ニ猶ト修復ハレハリ制
施アリ莫ニケトセモ文也

日本國判官正五品ノ上兼行鎮西府ノ太監
高階ノ真人遠成

右可_ス中大夫該太子中瓦餘_{シモト}如故

勅ス日本國ノ使判官正五品上兼行鎮西府ノ太
監高階ノ真人遠成等奉_レ其君長之命_ヲ
越我會同之礼越_テ漬波而万里獻_ス方物於

三陰所_ニ宜ク襄贊錫班榮可依前件

唐元和元年正月二十八日

中書令

閻

中書侍郎平章事臣鄭絪宜

中書舍人臣盧景亮奉行

奉_{スル}丁

勅_ヲ如右ノ牒到_{テハ}奉行_{セヨ}

元和元年正月日

檢扶司空兼侍中使

門下侍郎平章事

黃韋

拾事中登

月日

侍都事

左司郎中

吏部尚書 閣

吏部侍郎宗儒

尚書左並平章事左中書

告^ノ日本國ノ使判官正五品ノ上兼行鎮西府ノ

大監高階真人達成奉^{スル}

勅^ヲ如右、府到^テ奉行^{セヨ}

貰外郎次丸

主事榮日

令吏惣初
書令史

元和九年正月 日下ス

かくのぞく書せし件の事を八内紀有り
ト、海^ノ南不^レ納^ム一^レ乞^ム一^レ有
内^ノ書^アタマ^シト^シ。

今^ノ在^リ門達^シ候^ム未^シお達^シ言^ハ候^ム

大樹^ノ差^シ候^ム也^シ物^ノ不^レ有^ム是^ノ收^ム候^ム仍^シ

為^シ多^シ候^ム也^シ。

八月廿七日 范押

一秉前國白麻^ノ舊書^ア

今^ノ取^シ家^ノ所相續^シ事^ニ蒙^ム鴻^トノ^シ也^シ相^シ年^ニ

既而清御事、其御物之類仍以一看伸
駕使ノサニ

仲秋卷七 先押 道清園白麻ノ後書局
左八 吉通卿 佐進店書局内定名ハニモア
尾張左翁清御物と云

。乃紙經四粘根重本角少々
半墨角次角本毛毛と云々^ト
ナリトテ一ノ物に及ばず、半墨角
神祇私教釋族方々神祇に
あら多小之多々有り、行ひ、
才了了ナリテ、欲と凡そ之集の
致立トセナリトテ

己亥五月朔日晴閑東御昇進同三日諸家御饗應接案
勅使 高野權大納言保春卿 庭田前權大納言重條卿
宣旨ノ御使 押小路ノ大外記 士生ノ官勢
告使山科民部大丞 副使青木左門青木左門
仙洞使 梅小路權中納言共方卿
東宮使 豹尾權中納言隆長卿
女院使 滋野井宰相久澄卿
中宮使 外山前宰相光賴卿
大准后使交野三位杏
御衣紋 高倉前權中納言永福卿
御身固 土御門陰陽頭泰連朝臣

御衣紋御身固等ハ御黒書院トシ

上首

二條ノ右大臣綱平久
宣旨御位記之目

征夷大將軍 右近衛大將 右馬寮ノ御監
淳和昇学兩院別當通シ

右六通 官勢方 蓝箱 青木左門尉
内大臣 正二位 御位記 大將ノ叙留
隨身兵仗牛車

右立通 外記方 蓝箱 青木右兵衛尉
右御大廣間 出御 葵使進立庭上呼 御昇

進高声次ニ勅使院使等進ム 御劍等御弁次
右大臣家以下御太刀進上宮々并ニ殿下龙大臣
家等之御使畢リテ二條家近衛家殿上人傳
奏之雜掌並樂人惣代御冠師御將衣束師等
至ル奉ト拜ト

今日久武有官ノ面々皆束帶トシ

五月三日堂上方御饗食應ノ猿樂

翁三藩流仁喜

開口

拉弓

夫レ天アマノ北ヒタチノケツカツノククモウ
れ即アマツノキカツノククモウ

日引をめりき。傳代とりく。

三祐 窓弓 早持弓

野弓

市弓

田村 金弓

又七

猪弓

長弓

東山 宝弓

新弓

市弓

大弓

五糸弓 金割

吉弓

市弓

又八

羽弓 七矢美

長弓

猪弓

仁弓

六本弓 七尾弓 五糸弓

猪弓

又九

六本弓 七尾弓 五糸弓

猪弓

仁弓

盟トニシ

前將軍御政始之時ハ三家之公於振田篠前守正後之家會明也豈臣秀吉聚樂行幸之時會諸大名令盟自此

初歟

同月廿三日尾久飯田ノ上意士使大保
加賀守賜、長光ノ御刀

御馬一匹時服一百ノ日銀一ノ十牧伽羅一本ヲ

父武の官人ノ下次ハ之以六位次ノ下而之ノ席と
之子同位次者之先後不論とぞじとくをす。之に
以降年年主事ノ下に坐す。之を今小室法句
凡て行ひ氣すりて從み行ひうるはれに爲て昇り
正處行ひて西ノ口を出す。之より主事は其左右

の辨友のあ位なるかのサ却もあれどりが四臣
力く銀階すとまえを替され約月もうつて四臣す
つもクタシ小能され是方子ノ傳中勢ノ小を位大辨の
為位なりがとくや却て後三傳へ銀階す。事多
定不ううこふ是六代下のサ小もれの御堂上の
御と之度回一今年已生の補任とアリテ正
署上等方室小次高房在大年一人正署上等高
臺元年無法室高房在大年二人とも午年正
モ之とも委官の主義すとま可念ニス因位並
立す。未就

。西京西法止妙心詔書の比肩に籍田の詔すと後

御事サ、據サ之宮廟と東行苑園と改めたり。時
人苑園雖空と称せう。已云中圓滿也。自何院
の度多室在左府有紅白銀鴉上仍て火館と宣乞
燕居セイサト子在と花室の亭と下後園在大年
儀山園固壽樹名苑西都ノ一壯觀也。一旦華美
之瓦。而鳥布と向也。立帝は城之御宮を
宮一うちノ及庭室の御布とよ御室主院右
聖人先帝の附上皇前園御園と称ゆ爾若一國
此も高と少ふ。安ヒテ一視と上う。小室八、荷多十、松十
塔十、寺後五、風流五、と來て包合一。と云く太内
安弘和と名セ。華慶と清セ。れ立て元年小

ち亂了賤墟と申すと、大歎氣也。丙午二月英朝アキタウ
寺記シテモト

替錢 欠アツ筆ハサカ筆ハサカの立スル。かく手作ハサカ筆ハサカを多シ。ナシト
ひ數カウ筆ハサカを多シ。すりハタハタハタ。鼻檻ブシナガ。絆細ハツナ。包代ハウダ
坪ハタケ田ハタケ。小コトコトの日ヒ。筆ハサカを立スル。——早被ハラヒ。少ハス之唐音ハシマジ
也ハシマジ。包袋ハクヂも争アリ。——貴囉ミツジ。

楠正成タケマサと下先シマツシタと呼フ。——が將軍ノミツタクノ官成アシタク良
親王ノミツタク諱シメイと避ヒヨく。まよミヨと。ナシト。シテ。シテ。シテ。シテ。シテ。
字シメイ家ハシマジあこと諱シメイ。武士ハサムも三ミチふる事ナシ也
化ハシマジされハシマジて。走ハシマジれ。身ハシマジす。停ハシマジす。勝ハシマジ。位雄
とハシマジまろハシマジと。三ミチ下シマツ。まうハシマジ。終ハシマジれ。又ハシマジの手ハシマジを

ゆを譲ハシマジくわ。次ハシマジ公家ハシマジ。かく。ハシマジ。ハシマジ。と。すみ
り。も。う。れ。き。と。と。讀ハシマジ。正親町ハシマジノ祖ハシマジ左大臣ハシマジ。實雄ハシマジ筆ハサカ之。信雄ハシマジ初ハシマジ。の。よ。う。と
ゆ。——。ム。御ハシマジ。の。所ハシマジ。の。よ。ど。し。三ミチ。下シマツ。下シマツ。下シマツ。

也ハシマジ元山院ハシマジ本大納ハシマジ定誠ハシマジ卿ハシマジ。訖ハシマジと。え
。波海ハシマジ久石比半ハシマジ。力ハシマジ史ハシマジ。訓ハシマジ字ハシマジ。か。ひ。と。之。これ。と
トハシマジ字ハシマジ上ハシマジ舞ハシマジ。——。ゆハシマジト。ウト。常ハシマジ。づ。き。よ。古。實。今。長
今集ハシマジ字ハシマジ序ハシマジ。や。マト。わ。と。ト。の。字ハシマジ。と。上。放。下。門。て。讀。考
ひと。取。め。字ハシマジ。多。を。勧。被。寺。人。位。經。給。れ。と。也
或。人。曰。期。延。之。後。後。或。の。中。使。廳。の。判。官。乞。と。列
也。——。罪。人。と。刑。あり。併。そ。り。自。布。と。詔。て。往。有
首。と。玉。搭。と。以。も。歩。ま。と。す。自。し。罪。人。了。乞。

者を殺すとの民衆定にてまゝ下行政事と洋
て所をうかうかと見つこれ著鉢政なり
處在式ノ二十九因獄司ノ尼モア有の故ア原
者を實の犯罪の者、銅鉢又は盜枷と著し
來レシル原カノ御ひーもアリ今ハモモムシのニシ
尾列の後ノ御章とあさりとゆづけシテ御章
と青キトニ種ありシルとあらむなけをちりぢり
なげとじめ又にけのとぞと署ノ一わとちりあら
らとくと被一わとぞりあらむちりぢり
なる御列に多ニ御章とあとすうともわいすうる
多シ御名のサウナガラシ方ハタシラゲ御後方一言也

タノ原
平信長相対ササギの御く坐スツ北馬ヒツマトニシ
自秘奉する十二人と屏風カイフウと捕セたものゝも候
北馬ヒツマトニシテ、當セカタシ先シハシニシテ屏風擧ハタシラゲシ候
長村ナガムラの朝臣チヨンジン越生オオシマの後妻メシキおとこて義太幼ヨシタヒトを多々招
られ候

也トハ宣人掌ハシマツの列ハタシ加ハタシ而通ハタシマツとソシ事

屏風カイフウす

補佐ヒツゾウと極ハタシマツ大中臣オオノミコト景忠ヨシマツ卿ヨウジン延喜六年

十一月二十日進ハタシマツ參宿ハタシマツ同日神祇カミキ權大副ハタシマツ天和四年二月

九月退更正
四佐下
九月十日後叙後之佐

唐施八十部の事と云ふりハセ

燕樂 清商 西涼 天竺 高麗 亀茲

安國 跪勸 康國 高昌

我身ノ経一樂中う

四十音或幾十絃者と云ふ何と集つて考へて是

仰測と按す

栴檀伽羅也 沈水 蘇合 薫陸 菩金 白膠

青木 木杏也 零陵 甘松 鶴舌 丁香也

。唐音襄樂城府考の附、ごくありのうん一首

の字と詠せし所

。病をさはゆて死のつゝ見る死後の事、まの字の中
自筆と書く毫毛考究至る令と云ふてやうやうある
處に用ひる所と云ふてよそのうのうの年以降
。我が三年八月十日考収と云ふてソロシもやがて
五年一奇であるからそれと前とあたるやうである
。されば年号日譯ともかくせたまし玉押とす
。きくよどむこと最も多くとてあそびをもす
。タリ百萬ドウシナリ是と大閑法師世の傳承
。とくあ下あくせんと云ふて今の考定
。久定のあくせんと云ふ

中納言家定—宮内神利房—淡路守利賀—肥後守久定
。羣書類要卷ノ三慶民修礼の傳上戸八瓶下戸
二瓶と之よりて反テノホトノを瓶也モトアリ
多シム飲酒の多シモトモハナシスケタモトアリ
トゾトス

處已敬言語曰十言十健不如一嘿百巧百成不如

一拙

居官警語曰富不親^{ミツシキ}貧^フ不踈^{ウジモ}兮此^ハ是人間^ノ
大夫富則進^{スル}兮貧則退^ク此^ハ是人間^ノ真小輩

事林

廣記

祐大寺家^ノ今物^ヲ假^{マサハ}吉原^ノ子^ヲ詫^{マサハ}了^{タメ}先^ハ

ちのかず後方ヲ小竹根^ヲ和^モの筋^ヲあ
り^シと筋^のひん多^シの筋^ヲお^シく^シか
一^カり^シん^テ後^一身^アあ^ハの筋^ノを^シま^ハし
タ^ヒー^ト者^ノ筋^ヲか^ハも^ハの筋^人は^アり^カハ^日曰
新捨送^ノ八青別^ノ筋^ヲ左^系の經^ヲとあり^ト
或^人回^リわ^かう^テの收^本丸^ト書^ク昔^子家^紋の傳^ト
乃^れ多^シ毛^アく^シ也^アり^カハ^スハ^根半^幅額^ノ幕^ヲ
子^トよ^シす^カて^主す^カり^カハ^スハ^手の主^ノ了^シカ^セる
と^シ御^絵く^四方^{ナカタ}形^ノ案^ノ紋^ヲ緑^モ小^く化^カす^カみ
か^くれ立^リり^カハ^スハ^主人^ノ用^シ澄^ハ鉛^合金^代
の先祖自^リ於^テ在^カ財^トす源^ヲ難^ニ廻^カス

五郎と稱ひ且唐之屋の紋と下り御ふされ
えりりかと家の紋とすまし鉢金代系譜
乃て以此譜もす
織田信雄と世ノノブヲと號ム。これ初信意と名
號。一故信雄。改め。後もノヨトニノブカツ
と改つ。と左記。尼子。間宮。源
北畠。中納言。具教卿の実子。信意と一人
あらわす。と之を既に也。信意信雄
の名子とす。初ハ具豊と称セ。一具教の子。一人西名也信雄北畠
系圖。永大。又と書。と。北畠
年。元。具教卿の実子。尼子。尼子。列
信意と二人分をとる。あらわす。

但一諸家の傳々具教の子信意改信雅。其子
親顯。泰長八年。と。左記也。

異性相續ノ諸家大槻

近衛ノ信尋。公後陽成院。皇子

一條昭良。公信尋。公。弟

正親町。李秀。源重

保男

持明院。基定。男

以上藤氏

庭田。姪資

白川雅陳。藤原。永孝

廣幡。豊忠。久義。通

男

以上源氏

東坊城。盛長。藤原。秀康

男

以上芦氏

武家ノ大槩

保科正之

秀忠父ノ男今至正信朝臣

岩城貞隆

佐竹源義重ノ男

上松長尾氏光ト平家輝虎以来

久松

元吉原定勝賜ノ松平故昌源氏

松平下野守忠明

奥平信昌ノ男平氏

本多中務太輔忠国

松平刑部太輔源賴之男

本多綾殿助康俊

酒井源忠次男

小笠原龙之門佑信之三男

秋元但馬守喬朝

户田山城守忠昌男

牧野周防守康重

木庄因幡守藤原宗資男

内藤若狭守

糸津周防守

内藤主殿政貞土方宋女源ノ男

松平右介門大夫正綱

大河内秀綱ノ男

内藤駿河守清長

水野源守正ノ男

松平丹波守康重

本称戸田ト主殿久藤原氏也

松平周防守忠次

本小六松井

松平丹後守重直

小笠原秀政弟

相馬圖書頭宣胤

佐竹少将源義虎ノ男

石川主殿頭忠總

大久保忠隣男

脇坂中務少輔安政

坂田待徳紀正盛ノ男

板倉頼母重高

小笠原英利男

九鬼大和守隆方

松平伊勢守柳生對馬守男

菅堀羨作守親常

近藤織部正男

西尾丹波守忠永

酒井重忠ノ男

増山兵部少輔利湧

那須遠江守資祐ノ男

原市橋兵部直方

溝口藤原重雄宗在ノ男

久留鴻織部

脇坂沿路守安昭ノ男

太田原備前守典清

織田小重郎

藤

柳生帶刀宗重

固部長恭
男

右一万石以上諸家也其他暫ノ畧文

。本家年始より正月と清下りと多日と持て數々
す。天正十年正月二日、羽柴秀吉の御子・信長
候物の金あく一札を貰ひし。

本家元日より正月初三日天正の辰未と八爆竹と稀
石ある。由士三とおもてを抱きまわる。かずく年一月
ちゆくとくとけんゆとたまく一月一嘗ドウとちゆく
みを以てやうと地主。若手の藏あわく。度重ね了
て石と頬蓋ホラガウといふ。今古記録す。すうとく

。玉子頬蓋のめぐらはれのゆれのくわくわく

。椎の葉折敷タル上ヘニカレイモリ

飼盛カイモリ 太平記

。五十五

。おおとハ伏木木のまことおもて食と薦す。

盤とす。おとことそいとくわ

。左神宮の内宮の御饌八人エイジンも太宰タケシマと柏原カヒラと

。玉依タマヨとあら

